

芥川賞作家野呂邦暢と千歳

― 自衛隊員の青春記『草のつるぎ』考 ―

渡辺 敏子

千歳市民文芸の会事務局長

昭和四十九年、第七〇回芥川賞を『草のつるぎ』で受賞した野呂邦暢は三十二年六月から三十三年五月まで自衛隊員であった。一九歳から二〇歳にかけての約一年間である。

『草のつるぎ』は二部構成になっていて、第一部が『草のつるぎ』、第二部（後編）が『砦の冬』。芥川賞受賞作は第一部『草のつるぎ』である。昭和三十三年六月、佐世保相浦の第八新隊員教育隊に入隊。そこでの前期訓練の様子が淡々とした口調で語られている。第二部『砦の冬』は、千歳の野戦砲部隊で三カ月の後期訓練を終え、一冬を過ごした主人公が自衛隊を辞めるまでの物語である。

作者である野呂は「明らかに意図はしなかったが、この作品に昭和三十年代初期という時代の顔が現れていたとすればわたしはうれしい」「もの書きは時には一つの時代の証言者にもなり得るからだ」とあとがきで言っている。

野呂が過した千歳の六カ月から昭和三十年代初期の千歳を探ってみただけが、やはり芥川賞受賞作第一部『草のつるぎ』から入っていくべきであろう。

豊田健次著『それぞれの芥川賞 直木賞』に、昭和四十九年一月十六日開催の芥川賞選考会の翌々日十八日の『長崎新聞』夕刊に発表されたエッセイ『草のつるぎ』の中で野呂は次のように述べている。

あれから十六年たつ。もうすぐ十七年になるうとしている。にもかかわらずわたしは自衛隊員であった当時の事は、ついきのうのことのようにあざやかに思い出される。

高校を出た年、父が経営していた事業に失敗した。父は破産宣告をうけると同時に大病にかかって入院した。わたしは次男で弟妹が四人いた。上の妹はまだ中学生であった。わたしは働かなければならなかった。上京して仕事を探した。（略）

トラック相乗り、板金工、コック見習い、ラーメン出前、新聞配達、喫茶店のボーイ、店員、雑誌のセールス等という仕事ならいくらでもあった。（略）わたしは台東区のあるガソリンスタンドに就職した。

翌年、わたしはスタンドをやめて九州に帰り、佐世保の北東海岸にある陸自相浦第八新隊員教育隊に入隊した。そこで三十二年六月から八月末にかけての二カ月間、前期訓練を受けた。（略）自衛隊はいわばわたしの大学である。わたしは学校で教えられる以上のことをそこで学んだ気がする。第八教育隊で過ごした八週間のことをわたしは『草のつるぎ』に書いた。（略）

豊田は四〇年間の文芸春秋社勤務のうち延べ一〇年を週刊誌暮らし、後の三〇年間は文芸編集者であり、芥川賞、直木賞の下読み委員になっていた。昭和四十一年には『文學界』編集部の一員となり、前任者から分厚い原稿の束を渡される。

一枚目に暢達な大きな字で「壁の絵 野呂邦暢」と書かれていた。これが豊田にとって、数多くの作家たちとの出会い、第一号となった。これから八年後に野呂は『草のつるぎ』で芥川賞を受賞することになるが、「現場で処女作、デビュー作、ヒット作、代表作、話題作のすべてに接したのは彼一人だけ」とも言っている。しかも、野呂から豊田宛の手紙は二二〇通ほど残っているという。

豊田によると野呂の処女作は『壁の絵』、デビュー作は『鳥たちの河口』、

話題作は『草のつるぎ』、代表作は『諫早菫日記』である。

野呂が芥川賞を受賞するまでの彼の候補作品と、その年の受賞作品を追ってみる。

昭和四十二年一月(第五六回) 候補作品 野呂邦暢『壁の絵』

受賞作品 丸山健二『夏の流れ』

昭和四十二年七月(第五七回) 候補作品 野呂邦暢『白桃』

受賞作品 大城立裕『カクテル・パーティー』

昭和四十七年一月(第六八回) 候補作品 野呂邦暢『海辺の広い庭』

受賞作品 郷 静子『れくいえむ』

昭和四十八年七月(第六九回) 候補作品 野呂邦暢『鳥たちの河口』

受賞作品 三木 卓『鵜』

昭和四十九年一月(第七〇回) 候補作品 野呂邦暢『草のつるぎ』

受賞作品 野呂邦暢『草のつるぎ』

森 敦『月山』

「二〇歳前後に味わった塩の味がする体験(自衛隊生活)」を書きたいと思いつきながら長い間書けなかった理由を野呂は「一六年も経ってから理解する。」「自衛隊を外から見ている」「無意識のうちにかつての同僚や上官を裁いていた」「そういう特権があるかのごとく思いついてきた」。

ところが『草のつるぎ』という作品の優れている所以でもあり、野呂邦暢という作家の純粹な精神に打たれるところでもある。昭和三十年代初期の顔が表れていれば嬉しいと、野呂は言う。それは丁寧に見事に描かれた登場人物の一人ひとりが語っている。

野呂が撮影される主人公海東二士の所属する第三班一七名のうち一〇名は終始登場するが、人物が実によく描かれている。

小山二尉は区隊長、区隊長と気の合う鈴木三尉、レストランのボーイ、そこ

に来た中年男に率いられた若い娼婦三人。班長は助教であり、殆ど独身。西村は二七名の中でただ一人の妻帯者。いつも妻からの手紙を読んでいる。東郷は熊本で映画技師の見習いだった。加治木は私大卒で防大受験を希望している。桐野は休憩時間にタバコを吸う。一九歳なのに六〇歳に見えるほど落ち着きはらっている。缶詰のイワシを平等に分けなければ気が済まない。徳光はあまり話に加わらない。長崎で炭鉱夫だった。商魂逞しく、仲間に金を貸して儲ける。猿谷と松井はタバコのことと銃剣を抜いて喧嘩をする。

昭和三十年代初期、そして自衛隊に入隊してきた少年たちの生活の貧しさが偲ばれる。彼らは国防の意識に燃えていたわけでもなく、ただ貧しさからいかに立ち上がっていくかという一途さを感じさせる。敗戦から一〇余年、戦のた



写真1 自衛隊発足当初の募集ポスター
ポスターは全国市区町村役場の掲示板に張り出された

めの訓練は空しかったに違いない。そこを乗り越えなければ彼らの八方塞がりの貧しさは越えられないのだ。

初めての野営で桐野が言う。「自衛隊に入っただけよかったと思うことは毎日ご馳走がくえること」「生まれて十八年間食後の果物など食べた事はなかった」。

海東二士が入隊したのもやはり貧しさが第一の理由であつたらう。次に

チラリと姿を見せる父親像がある。野呂は「自衛隊に入るといふ反時代的行為の説明を、アナクロ親父の存在で代行させるのが意図だった」が失敗したと豊田宛ての手紙で言っている。

毎日の新聞が驚天動地のニュースではち切れそうに見えたのだ。天皇の人間宣言、戦争犯罪人の裁判、どんな記事もおやじの憤慨の種にならないものはなかった。失うものとして今や何一つなくせに、おやじは財閥の解体や農地解放についてぶつくさ愚痴ったものだ。

そして最も大きく占めていた理由は、青春期に独特の自「否定」であった。

助手たちを苛立たせる何かをぼくは身につけているのかもしれない。本能的に助手たちはそれを嗅ぎつけて目の敵にする……すこぶるいかさない草色の作業着など着込んで鉄砲かつぎに身をやつているのも、元ほといえ、ぼくの中にある何かイヤなものを壊したいからだ……ぼくは自分の顔つきが、いやそれに限らず自分自身のすべてがイヤだ。ぼくは別人になりたい。ぼく以外の他人になりたい……そのためには自分を使いつくす必要がある……。

海東二王が後期訓練の任地を北海道と希望したのもこれらの心の呪縛があったのかも知れない。訓練が終盤に差し掛かるころ、第一部『草のつるぎ』のクライマックスが展開される。

すでに三個中隊がたつぷりとこねまわした演習場は肘も埋まるぬかるみになっていた。……たまらなく気が滅入った。雨のせいかぬかるみのせいか分らない。……ぼくほといえ、ばもの心ついてから今までしょっちゅう泥の中であがいていたようなものだった。

班長が「目標、見晴し台下の湖、早駆けに前へ」と叫ぶ。尾根の向こう側の水たまりに飛び込み、作業着を脱いで水に叩いて泥を落とし始める。地雷を爆発させてしまった時、与那嶺は脱糞してしまっただ。「よく洗え」と桐野が怒る。水の中で子供のようにはしゃいで、裸の彼らは上機嫌だった。そのうち三

人は精液を飛ばして競う。無邪気な思春期の少年たちの姿であった。

海東二士に一つの心の転機が突然のように訪れる。

……ぼくは洗った服を草の上に投げ上げた。体から力を抜いて水に漂った。五十四日間、彼らを憎んでいたとは自分でも信じられなかった。西村も松井も与那嶺も、ぼくが憎むのと同じようにぼくを嫌っているのだと思っていた。ぼく自身であることをやめ、無色透明の他人になることが望みだった。なんとという錯覚だろう。ぼくは初めから何者でもなかったのだ。水に浮いて漂っている今それを悟った。ぼくは彼らの小便と糞と精液につかって浮いているわけだった。

『草のつるぎ』は自衛隊という特殊な世界で生きた野呂の青春記である。自衛隊の内部から描かれているが、組織の暴露や批判などではない。「ぼくは初めから何者でもなかったのだ」という、自「受容」の目覚めにいたる極めて文学性の高い作品である。

わたしはその後、北海道千歳に配属された。特科である。その頃のこととは後編『碧の冬』に書いた（前出『長崎新聞』エッセイ『草のつるぎ』）。

いよいよ第二部『碧の冬』に入るが、海東二王（野呂邦暢）が北海道千歳の第一特科第四特科群第七一七特科大隊に配属されたのが昭和三十三年九月初め、陸上自衛隊が発足してまた三年のことである。

第七一七特科大隊は作品上の名で、実部隊は第一一七特科大隊であろう。駐屯地は作品上、千歳であるが東千歳である。この部隊は昭和三十一年に東千歳で新編、三十七年上富良野に移駐、平成十七年に廃止になっている。

『増補千歳市史』を参考に千歳における初期の戦後部隊史を追ってみた。

・警察予備隊 昭和二十五年八月十日警察予備隊の設置を定める。八月二十一日、第一回入隊日。北海道は遅れて八月二十三日になったともいわれている。募集七五、〇〇〇人。九月上旬まで募集と試験は実施された。二十五年八月千歳町に駐屯した警察予備隊員数三、一〇〇〇余人。翌二十六年、オクラホマ州兵師団が来駐

すると警察予備隊は全員ほかに移ったといわれている。

・保安隊 昭和二十七年四月二十八日日米安保条約が発効し、我が国も自国防衛のため責任ある態度を執るよう規定される。二十七年十月十五日「必要ある場合に行動する」質的变化を遂げて発足した。十一月十五日北海道に全国初めての方面隊である北部方面隊が創設された。北部方面隊は総監部を札幌に置き、北海道、青森、岩手、秋田、宮城の各県を含む地域を担当。北部方面隊は戦車を欠いていたが、特科（砲兵）を増加し、旭川、名寄、留萌、釧路、南恵庭、島松、千歳、幌別、岩見沢の九カ所にキャンプ増設を図って土地取得に乗り出す。十二月一日から本州方面から北海道転用が始められ、二十八年四月十五日までそれぞれ新配置に就く。

十二月十二日千歳町字北信濃に保安隊千歳駐屯部隊（独立第一特科群）が開設。

・陸上自衛隊 昭和二十九年三月二十八日我が国と米軍の間にMSA武器援助協定が結ばれ、六月二日「防衛庁設置法案」「自衛隊法案」の防衛二法案が成立、陸海空三自衛隊が発足した。九月一日北部方面隊第五管区隊創設に伴い第十一普通科連隊は小月などから千歳町への移駐のための再編成を実施、九月二十三日東千歳駐屯地に移駐を完了した。三十年十二月真駒内に第七混成団が編成、三十六年二月には機械化に改編、翌年一月十八日東千歳に移駐。三十七年八月十五日、全国唯一の機械化「第七師団」が発足した。

第二部（後編）『砦の冬』は第一部『草のつるぎ』の倍の長さはある。ここでは隊内生活がさらに淡々と描かれていると感じる。

千歳駐屯地に来て三カ月後、五つの班に分けられる。教育中隊の六割が砲班。彼らはナンバー中隊である第一中隊から第四中隊に配分された。三割は有線と無線班。残り一割に満たないのがFDC（射撃指揮）班と測量班。教育隊の助教、助手たちは大隊の各中隊に所属する陸曹、士長がつとめている。教育が終われば原隊に戻ることになる。新隊員は三カ月の後期教育を受ける。

教育中隊の基幹要員の大半は東北出身。全員が九州から来た新隊員には東北

弁がよく聞き取れない。彼らは時々東北弁を真似てうき晴らしをした。一方九州出身の新隊員は別名「ぎゃんがん」と呼ばれた。これも言葉からきていた。

仲間には炭鉱夫、八幡から来た鋳物工、対馬の漁師、五島の百姓。熊本出身が五割を占め、映画技師の見習い、倒産した土建会社の社員、やくざの使い走りをしてきた者もいたが彼らは九州に残り、ブルドーザーやダンプカーの運転免許を取り、ほかの就職に役立てたいと考えた。

海東は普通科（歩兵）を希望する。出来るだけ遠くへ行きたい願いから北海道を選ぶ。やはり、貧しさから脱したい願いが第一であつたろうが、「しぼりたての牛乳のような新鮮な世界。切れば血の滲むような一刻一刻が張りつめた時間」が欲しかった。

彼らは四日間をかけて「新しい天地、草原も丘もたった今石鹼とワイヤブラシで洗ったように新鮮」な任地に着いたのだった。

ここでも第一部と同じように登場人物が鮮明に巧みに描かれている。海東二士は特科の測量班に配属される。S2（第二科）情報担当である。S1（人事担当）の剣持一尉は満州でソ連軍に捕えられ、シベリアのラーゲリーで五年間材木運びをやった。骨の髄からのアカ嫌い。よく時代小説を読んでいる。本間一尉はインドシナ帰り。いつもぶつぶつ呟きながら計算尺をひねくりまわしている。S4（補給担当）主任小松二尉は管理中隊と大隊本部を行ったり来たりで半時間と席にいたためしがない。S2主任は静岡の富士学校へ派遣されており、安宅二尉が業務を代行している。彼はどこか頼りなく「そうですか、すみませんなあ」が口癖。剣持二尉に、それがよくないと忠告される場面がある。敬礼は招き猫のしぐさに見える。安宅二尉の鬱積は心を許しているらしい海東二士に向けられる。千歳での半年の間に五回も剣道の相手をさせられ、海東は気も失わんばかりに打ちのめされる（S3は訓練担当である）。

佐久間二曹はいつも「モーニン」と朝の挨拶をする。実際の事務は陸士長た

ちが取り仕切っている。丹下十長は非常に真面目で隊務に誠実である。海東の入った事務所は四人の陸尉と三人の陸士長がいる。海東は新入り最下級の二等陸士。雑用がみな回ってくる。それは平気だが、主任たちの目がたまらないのである。

若い彼らは「野良犬よりも浅ましく」飢えていた、とある。夕食後PXへ行き、餡パンを買い、帰り道に迷ってしまったことがある。アメリカ軍兵士の建物付近まで行った。その内部が見え、テーブルもロッカーも輝いているように見える。九月というのにストーブを使い、彼らはTシャツ一枚になり、テーブルを挟んでカードをもてあそんでいた。

読み進むうちに身近な地名が出てきて今も海東二士こと野呂邦暢が自衛官として千歳のどこかにいそうな気がしてくる。

七日間の野営をした島松演習場。地誌踏査には安宅二尉、佐久間二曹、丹下士長、海東二士の四人が出る。根志越、幌別、追分、安平、白老。地図を用意するのは海東の役目。地図庫は不便な場所に離れており、地図を出し入れするのに往復する間一人になれる。それが海東の楽しみみの時間だった。

踏査のコースは根志越から長都沼を経て幌加へ。由仁を越えて夕張川上流へ向かう予定である。

ジープの中で安宅二尉が地名について語る。「恵庭岳の手前、国道の東側にアイヌの砦跡があります」「砦のことをアイヌ語でチャシといいます。北海道にはチャシとつく地名がたくさんあります。ほぼ昔の砦とみていいでしょう」

安宅二尉は部下にも上級者と同じように気をつかう。「ぶっ殺してやりたいくらいですよ、あんな男。見ているとこっちまでいらいらしてやり切れんのですよ」と丹下十長は言う。「いたわってやれよ」新隊員の海東二士だつて何ぐれとなくかばっているじゃないか、と佐久間二曹、安宅二尉という男に野呂邦暢が投影されているように思えてしかたがない。



写真2 市制施行に向けて建設中の旧市庁舎（昭和32年10月頃撮影）野呂邦暢が千歳の部隊に異動してきた頃の建設状況 33年3月に完成、4ヵ月間は町役場庁舎として使われた

九月初めに千歳に来て十月まで外出禁止。十月に一、二度外出し、十一月には再び外出禁止。駐屯地から町まで片道走るのに三〇分かかった。「小川を渡ればそこが千歳町だ」とある。走ったときは町を抜け青葉公園で休んだ。九州の田舎町との決定的な違いは水田が見当たらないことだった。

外出する新隊員に「お前ら気をつけよ。」

千歳園というな、どんな薬でもなおらん病気をこの女どもは……と高塔三曹が注意する。新隊員の外出は性欲の解消に結び付いている。海東は高塔三曹の言った「千歳園」が頭から離れず、そんな気になれない。

売春防止法は昭和三十一年（一九五六）年五月に成立し翌年四月に施行されたが、刑事処分を伴う完全施行は野呂が第一七特科大隊に配属された三十二年九月の半年後三十二年四月のことだった。

「例の禁止法が国会を通つたでしょう。四月から若か隊員はどぎゃんすればよいか」「かえって隊員の身のためにはなると思えますよ。第一お金を使わなくなる。貯金が増えるでしょう」「若か隊員が可哀想かばい」

駆け足と除雪と灌木伐採で体を使う。性犯罪が増えやしないか。巡察を厳しくやればよい。女たちは消えてしまうのか。消えやしないね、絶対に。大っぴらに商売できないと、かえって病気が拡がりはいないか。アメ公の女たちにも禁止法は適用されるのか。オンリーたちはどうなる——中隊長たちの会話である。

本部隊に配属されてよかったと思うことが一つだけある、と海東二士は言う。九九式小銃の代わりにカービン銃を測量班だけに支給されたことだった。九九式は昔の陸軍が使っていた鉄砲で、米軍に押収されていたものだった。彼らはライフルといえばM1ガーランドしか知らなかった。

九九式はM1ガーランド銃にくらべると話にならなかった。ぼくらは九九式をけなさなかった。話題にさえしなかった。九九式を馬鹿にするのは易しかったが、この場合、馬鹿にしたとすれば日本という国の貧しさなのであり、それはとりもなおさずぼくら自身の貧しさなのだった。

外出した海東二士は当時の街の様子をこう述べている。

町を二つに別けて川が流れている。映画館の裏手で折れるとその川にかかった橋に出る。木の欄干にもたれてしていると気が休まった。

映画館は清水町にあった千歳座であり、橋は新橋であろう。

物語の終わりに近く、兎狩りが実施される。恵庭岳山麓の丘陵地帯である。各中隊が競う狩りで一羽につき二百円が支払われるという。雪が降りしきる中で海東は群から離れ、迷ってしまう。崖を滑り落ち、カラマツの幹に右足が挟まり動けなくなる。雪の中で例えようなくいい気分になり、次々と幻が表れた。同僚、上司、受けた新隊員教育の様子、特殊な言葉。あやうく凍死するところの海東に現れた幻は異様な世界だった。

海東は道路を見るのが好きだった。

道の先にはどんな町があるのだろうか。どんな人間が住んでいるのだろうか、と

考えるのが好きだった。(略) (誰に会おうと敬礼なんかせずに)好きな仕事がしなくなった。好きでなくても仕事らしい仕事ならどんな仕事でも良かった。(略) 道路は手を叩き、歌をうたい、そのかしてぼくを遠くへと誘うかのようだ。帰りたい、とぼくは思った。

海東は自衛隊を辞める決心をする。安宅二尉と五回目のこれが最後の剣道の手合わせをする。「ぼくが向かい合っているのは何者なのか。人をしたたかひつぱたいておいて、すみませんと涙を流すのはどういう簡なのか。」向かい合っているのはもう一人の海東に違いない。最後に海東は安宅二尉めがけて体ごとぶつかっていく。

昭和五十五年五月、大型連休に入る直前、野呂邦暢上京。この時初めて野呂、向田邦子の両名は顔を合わせた。六本木の中華料理店。二次会は豊田の行きつけの酒場。普段飲まない野呂が水割りをお代わりしていたのが印象的だったと豊田は言う。その一〇日ほど後、野呂は心筋梗塞で急死する。四二歳であつた。

『草のつるぎ』というタイトルについて野呂は「あとがき」の中で次のように述べている。

『草のつるぎ』とは宮庭にしがっていた葎科の硬い葉身を指し、九州各地から集まった少年たちの肉体をも意味する。小銃を抱えて草原を這い回れば、草はさながらナイフのようにわたし達を刺し、時には優しく肌を愛撫するかと思われた。兵士とはそもそも肉体が一個の武器である。(略) 農夫、工員、漁師、坑夫であつた隊員も無名の民衆であつてみれば、彼ら自身一茎の草と言えないだろうか。

野呂邦暢 (昭和十二年九月二十日〜五十五年五月七日 享年四二歳)

長崎県長崎市生まれ 本名・納所邦暢

昭和三十一年 長崎県立諫早高等学校卒業

職を転々とした後、昭和三十二年 佐世保陸上自衛隊入隊

昭和四十年 『ある男の故郷』 第二一回文學界新人賞佳作受賞

昭和四十九年 『草のつるぎ』 第七〇回芥川賞受賞

毎年五月最終日曜日に菫浦忌が行われる（諫早市上山公園内野呂文学碑前）

初出誌

『草のつるぎ』 『文學界』 昭和四十八年十二月号

『砦の冬』 『文學界』 昭和四十九年 三月号

参考文献

千歳市 『増補千歳市史』 昭和四十九年

豊田健次 『それぞれの芥川賞 直木賞』 文芸春秋社 平成十六年

第一特科団 『第一特科団史』 昭和三十一年

『草のつるぎ』は千歳市立図書館に蔵書されています。ぜひ多くの皆さんが読んでくださることを希望します。



写真3 野呂邦暢著『草のつるぎ』文芸春秋刊
千歳が舞台の『砦の冬』が収録されている
市立図書館は野呂作品としてほかに『野呂邦暢作品集』『夕暮れの緑の光』『落城記』を蔵書している